

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

文学部・日本語・日本文学科
井上 諭一

作成日 2024年1月31日

1. 教育の責務

1987年4月に弘前学院大学（文学部、当時は日本文学科）に採用され、今年で勤続36年目になった。

専門は日本近代文学・文化であり、本学は主として日本近現代文学、日本現代文化についての講義・演習を担当している。一部、オムニバス形式で文学理論、キリスト教文学についての講義も行う。

大学院の文学研究科を兼務している。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
日本文化概論A	1年	講義	前期	21世紀における「日本」や「文化」について考える基礎
日本文化概論B	1年	講義	後期	21世紀における「日本」や「文化」について考える基礎、各論
日本近現代文学史	1年	講義	前期	常識的な近代文学史の知識 江戸時代後期から現代まで
日本マンガの歴史	2年	講義	前期	「文学史各論」として、マンガの特質を歴史的な観点から講義
言語・文学・文化の基礎	1年	講義	前期	オムニバスで1時間担当、批評理論
キリスト教文学	1年	講義	後期	オムニバスで1時間担当、キリスト教作家
日本の映像表現	2年	講義	後期	日本映画の歴史、日本における映画産業の成立と発展、日本アニメの歴史
現代日本マンガ論	2年	講義	後期	現代日本を代表するマンガについて、特徴と優位性、文化的立ち位置
卒業論文	4年	講義	通年	問題の発見、考察、解決
日本文化演習 I A	3年	演習	前期	1990年代以降に作られた小説、映画、マンガ
日本文化演習 I B	3年	演習	後期	2010年以降に作られた小説、映画、マンガ
日本文化演習 II A	4年	演習	前期	文学理論（批評理論）を各自の“読み”“解釈”に結びつけて行く

日本文化演習ⅡB	4年	演習	後期	文学理論（批評理論）を各自の“読み”“解釈”に結びつけて行く
日本文学演習Ⅳ	院1年	演習	後期	永井荷風、太宰治、三島由紀夫の小説の方法

2. 教育の理念

現代における文学部の教育理念について、井上は以下のように考えている。

文学部では、21世紀の知識人として通用する総合的な視野を持った人材の育成を目指している。すなわち、あまりに狭隘な「専門性」に早期からとられるのではなく、人文諸科学に対する広い知識を持った上で、あらためて自己の専門性を認識するような、「バランスの取れた」人間を育てようとしている。それは、古い「教養主義」とは似て非なるものであって、今ここにある自分と世界を、適切な距離感を持って認識し、自ら問題を発見して解決して行く能力を涵養するものである。言い換えれば「世界の中で生きて行く力」を身につける、ということである。

20世紀の優れたSF作家ヴァン・ヴォークトは、科学者が狭い専門性にとらわれて全体を見失う未来像を予見し、全分野を統合するネクシャリズム＝「総合科学」という架空の学問体系を書いた。また同じくアイザック・アシモフは数学的手法による「心理歴史学」による未来予測を描いた。今、それらの夢はコンピュータとネットワーク、さらに人工知能の発展によって実現しつつある。文学部こそが、この問題意識を引き継ぎ、受け止めていることに井上は疑問を持っていない。

一般論としては特に高度な専門教育を学部レベルで実行することは困難で無意味な部分もあるから、きわめて高度な専門教育は大学院に譲るかたちになる。とはいえ、意欲にあふれた学生に関しては、時に学部レベルを超えて伝えるべき場面もある。

3. 教育の方法

講義では、全体の相当部分に演習の手法を取り入れ、学生個人による意見表明やプレゼンテーションおよびディスカッションの時間を取っている。最も重視しているのは、独創性である。（つまらない正論よりは、面白い間違いを）時間中の質疑応答だけではなく、ネットワーク（Teams）を介しての双方向的なやり取りも積極的に行うので、受講者は日常的にTeamsに接続する必要がある。

試験やレポート等の評価においては、基本的な知識を修得していれば60%、歴史的な経緯について理解していれば80%、自分自身の見解を記述してあれば90%以上得点できるように問題を設定する。

演習では、課題設定を含め、対象とする作家・作品を履修者との協議で決定する。また、直接の題材だけではなく、その周辺の状況（政治、経済、軍事その他）にも注意を払い、時代と文化の双方を考察する。特に、科学技術の発展については注意を払う。

演習時間中には参加者全員がWi-Fiに接続し、いわば「調べながら討論する」ことを前提とする。接続できる端末がない場合は、科目担当者（井上）が用意する。資料等はできる限り事前にクラウドにアップし、効率良い勉強をするように心がける。

評価は、発表時の内容だけではなく、毎時間における討論への参加状況を重視して行う。このために、参加者の同意を得た上で、毎回、適切な記録を取る。（音声または画像）

4. 教育の成果

「授業評価アンケート」の結果を踏まえて記述する。

1 学生自身の自己評価

出席やレポート提出などでは概ね平均的か、それ以上の評価が出ているが、「シラバスに記載されている到達目標や評価方法を読んで知っている」の評価は際立って低く、「事前学習・事後学習に取り組んでいる」の数字も低い。

2 授業担当者に対する評価

この項目群では、概ね高く評価されているが、「教員の授業方法や使用した教材は、授業の内容の理解に役立つように工夫されている」の評価が低い傾向にある。

3 授業内容に関する評価

全体としては、平均値より高い方向で推移しているとみてよいが、演習科目で難易度が適切でないという評価があった。また、授業の進め方のペースも適切でないという評価があった。「シラバスの記載に沿って展開している」の評価が低いことと合わせて考えると、いずれも内容的に、難しすぎる、早すぎる、予想していたより難度が高い、という意味に理解している。（形式的には全くシラバス通りに進めているので）

なお、同学年配当の講義・演習で、ほぼ全く同じ方法で授業を進行しているにも関わらず評価が逆転しているように見えるところが一部にあり、その原因は今のところ不明である。

5. 教育の改善

上記の「授業評価アンケート」の結果を踏まえて記述する。

1 シラバスへの記載方法の改善

より理解しやすく、かつ「読む気にさせる」シラバスに書き換える。特に、作家作品については身近な具体例を盛り込むことで、実際の講義・演習の内容をイメージしやすくなるようにする。これによって、予習する率は上がるのが期待される。復習については、次項を参照のこと。

2 授業方法・教材の変更

おそらく量的に多すぎることによる未消化分があると推測されるので、特に文学史など網羅的な事象を扱う講義では、講義内容を精選することが必要と思われる。その分の知識不足は、復習を中心とする学生の自学自習に期待する形となるが、ネットを介した指導に期待をつないでいる。

3 授業内容の難度が高いと思われることに関しては、現状で授業中でも質問を受け付けているのだが、浸透しきっていないようなので、さらに工夫する。具体的には、ネットワーク（Teams）を介した質問とそれに対する返答を、授業中におけるリアルタイムに可能とする。講義しながら答える形になるので、教員の負担は増えるが、やむを得ない。

6. 教育の目標

21世紀における総合的な知性を育成することが教育の目標である。戦争や感染症の蔓延、あるいは生命科学や人工知能の飛躍的な発達などによって、パラダイムの大変革が進行中の現在、諸学を糾合して社会の中核を担えるのは、基礎と応用を行き来する文学部のような学問領域である。

具体的には、厳密な本文批判＝テキストクリティークの力（当然ながら、いわゆるフェイク情報を見抜くスキルを含む）をつけること、分散所在する情報を、コンピュータ・人工知能の力を存分に使いながら集めて行く能力、そして共通感覚＝コモンセンスに基づいてそれらを総合的に判断できる知力を涵養する。

その成果は、短期的には学生の成績となって現れるが、長期的かつ本来的には、社会の中における学生・卒業生の活動によって測られる。たとえば「一見、娯楽性の強いライトノベルやマンガ」のように見えて、実は現実への高度な提言を含むような作品を書く者が現れた時、教育目標の達成度合いが可視化されることになるだろう。その一端は、2024年現在、すでに現れている。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 定期試験結果
4. リアクションペーパー（毎時間提出）
5. ルーブリック
6. 授業改善書